OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞矢原隆行（著・訳），トム・アンデルセン（著）『会話哲学の軌跡 ： リフレクティング・チームからリフレクティング・プロセスへ』
Author(s)	矢守, 克也
Citation	災害と共生. 2023, 7(1), p. 17-24
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93073
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

矢原隆行（著・訳），トム・アンデルセン（著）『会話哲学の軌跡 ― リフレクティング・チームからリフレクティング・プロセスへ』　金剛出版，2022 年 12 月刊，201 頁

矢守克也[1]
Katsuya YAMORI

１．リフレクティングとは何か

本書は、トム・アンデルセンによって創始されたリフレクティングについて、その書名が示しているように、それを奇抜なミーティング手法として扱うのではなく、リフレクティングのプロセスを全体として支えている会話哲学や、この手法が生まれ育ってきた軌跡の方に光をあてて論じた好著である。リフレクティングについては、本書の他にも、アンデルセンの主著の邦訳（アンデルセン, 2015）、本書の著者矢原隆行氏の別著（本稿でも何度か引用する矢原（2016）など）、あるいは、近年注目を集めているオープンダイアローグとの関係ついて論じた論文など多数の媒体で紹介されているので、ここでは、概要だけを示しておく。もっとも、「リフレクティングとはこういうこと（だけ）を指す」などと、その定義をワン・センテンスで無造作に表現できるかのように扱う態度自体、きっと著者による批判の対象になるだろう。その自覚はあるつもりだ。ただ、本書評だけを読んでくださる読者の便に供するため、ここでは勘弁いただくことにしたい。

リフレクティングとは、ノルウェーの精神科医トム・アンデルセンが生み出したリフレクティング・プロセスのことである。リフレクティング・プロセスとは、― 典型的には、相互反転可能なワンウェイ・ミラーで隔てられた面接室（通常、相談者と面接者が在室）と観察室（通常、リフレクティング・チームが在室）を用いて ― 相談者と面接者との会話が面接室で行われた後、観察室からこの会話を観察していたリフレクティング・チームの会話を、― 典型的には、両室の明暗調整と音声システムの方向反転によってワンウェイの方向を逆転させて ― 今度は逆に、面接室にいる面接者と相談者の方が聞くというプロセスを通して（あるいは、この反転を数回繰り返して）、本質的には、相談者、面接者、そしてリフレクティング・チームのメンバー全員の外的会話（はなすこと）と内的会話（きくこと）の促進を目指す試み、である（図1参照）。

以上をミニマムな予備知識として、次節以降、本書評で柱に据える3つの論点に進んでいくことにしたい。評者が注目する3つの論点とは、第1に、空間配置へのこだわりとその是非、第2に、「あれかこれか」／「あれもこれも」、第3に、アクションリサーチとの接点、である。

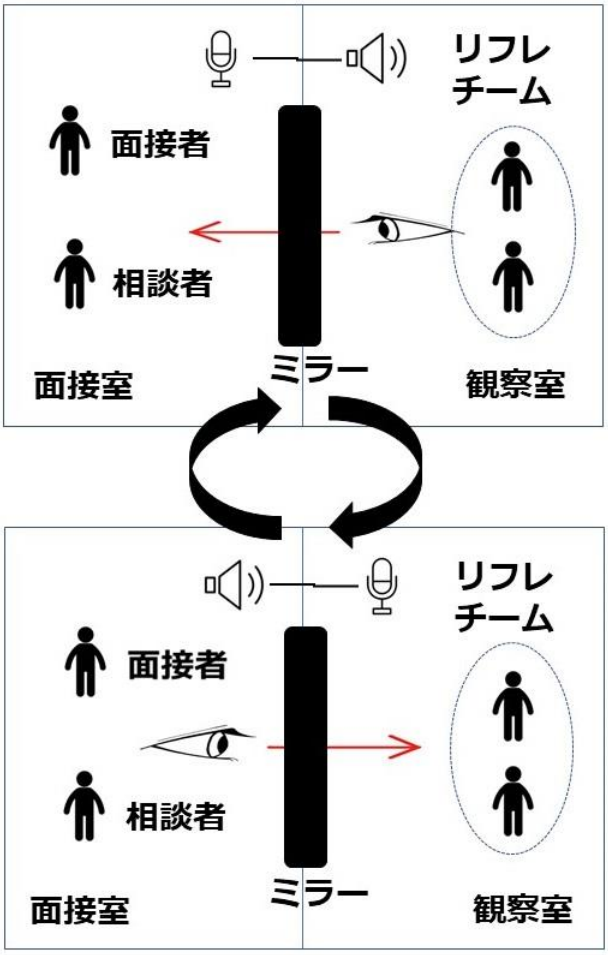

図1 リフレクティングにおける典型的な空間配置

２．空間配置へのこだわりとその是非

2.1 ワンウェイ・ミラーという象徴

本書で、あるいは、別著（矢原, 2016）で、著者は、リフレクティングを、（ワンウェイ・ミラーを利用した）ものめずらしい面接技法として理解することを繰り返し戒めている。「リフレクティングが一定

*1 京都大学防災研究所 教授
Professor, Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

の会話形式を指す言葉として流通している様子を目にすることも多くなった。そこに見られるのは、せいぜい新奇なミーティング方法のマニュアルやレシピの類いで、アンデルセンたちが勇気と恐れを伴いながら踏み出したラディカルな一歩の面影からは、ずいぶん遠く感じられるものだ」［p.v-vi；以下、本書からの引用はすべて［括弧］で表記］、「ワンウェイ・ミラーは必須ではないし、話したり、聞いたりする役割を交互に行うためのチームすらそうである」［p.84］、「それ（リフレクティング：評者挿入）をある種のクリシェとして、また、専門家的な物言いの箔付けとして取り上げた瞬間、それ自身を離れていくような構えとして、リフレクティングはあり続ける」［p.179］、「リフレクティング・チーム形式の会話をおこなうために、明かりや音声を切り換え可能なワンウェイ・ミラー、マイクなどの完備された部屋が不可欠というわけではありません。それらの道具は、あくまで1985年3月の実践当時のアンデルセンらがミラノ派によって定式化された家族療法の文脈を踏まえていたからこそ、その場に存在したものであり、ある意味、そうした既存の文脈を超え出るためにこそ、有効活用されたものでした」（矢原, 2016, p.29）。

評者は、こうした主張を理解できたつもりだし、また、その趣旨に完全に賛同する者である。実際、パイオニアたちの悪戦苦闘の中から何ごとかが創造されたとしても、それが市民権を得た途端に、当初の「勇気と恐れ」が忘れ去られ、創造的なそれが陳腐化するというストーリーはしばしば耳にする。その上、さらに悪くすると、「リフレクティング」であれ、「ラポール」であれ、「共分散構造分析」であれ、「キャッチワードをただ消費することのみに関心がある場合には、それらを表面的な手続き、いわばアリバイ工作として形だけで済ませてしまうこともできるでしょうが、それとともにリフレクティング（あるいは、ラポールや共分散構造分析；評者挿入）の最も有効な部分は、雲散霧消してしまう」（矢原, 2016, p.34）。つまり、「本研究では、ワンウェイ・ミラーを用いたリフレクティング・チーム手法に依拠してスーパーバイジングを実施した（以上！）」といった態度は、著者がもっとも忌避するところであることは、評者としても理解できるし、また大いに賛同する。

2.2 〈極限値〉としての空間配置

その前提のもとで、それでもあえて、ここでは、ワンウェイ・ミラーで隔てられた面接室と観察室という空間配置にこだわって議論を進めてみたい。そして、この先の議論については、細部はともかく基本線においては、本書の著者からも支持を得られるだろうと評者は考えている。なぜなら、評者の空間配置へのこだわりは、ワンウェイ・ミラーを単なる面接手法や舞台装置と見なしてのそれではなく、当該の空間配置の背後にある、ないし、空間配置が象徴している人びとの関係性や、関係性とともにある自己の成立への関心に動機づけられているからである。著者は、「リフレクティングをアンデルセンの会話哲学という根から切り離してしまわぬこと」［p.vi］が重要だと指摘している。その通りだし、そうだとすれば、著者が問題視しているのは、空間配置を、リフレクティングの基盤にある思想（会話哲学）と切り離して見つめることであって、会話哲学やリフレクティングに参与する人びとの関係性と分かち難く結びついた限りでの空間配置は、むしろ重視されてしかるべきであろう。

もう一つ、それでも空間配置に注目してもいいのではないかと思える理由がある。それは、リフレクティングがもつ多様な可能性そのこと ― ちなみに、本書の第4章のタイトルは「リフレクティング・トークといってもいろいろ：これがぼくのだ」である ― が示唆することである。論じてきたように、リフレクティングは、たとえばワンウェイ・ミラーに象徴される、特定の手続きに紐づいた概念ではない。リフレクティング・プロセスには多様なバリエーションと可能性がある。実際、本書には、グループ・スーパービジョン、スタッフ会議、経営幹部会議、質的研究など、多種多様な場面でリフレクティングを活用することができることが示され、適用事例も紹介されている。

たしかに、これらの手法にもリフレクティングの思想は反映されてはいる。しかし、これらは言ってみれば若干薄められたサンプルであって、リフレクティングの核心がそこからビビッドに伝わってはこないとも感じられるのだ。リフレクティングが、「新たな治療関係における人々のあり方を大きく切り拓く画期的な一歩」（矢原, 2016, p.17）であり、「セラピーをコラボレイティヴなプロセスに変えていく新たな方向性を体現する取り組み…（中略）…家族療法の歴史、さらには広くセラピーの歴史の大きな転換点をなす」［p.23］こと、この迫力は、姉妹事例や上述の応用場面（だけ）を眺めていても今ひとつクリアに伝わってこない憾みがある。

別言すれば、「セラピストだけが観察し語り、ク

ライアントはもっぱら観察され聞かされるだけ」、この伝統的な関係性、および、それを象徴し、またそれをアフォードしてきた空間配置、それに対してアンデルセンが禁じ得なかった「居心地の悪さ」［p.84］。これらを踏み台に、彼が「勇気と恐れを伴いながら踏み出そうとしたラディカルな一歩」［p.vi］― これを感得するためには、リフレクティングの、言わば〈平均値〉まわりのケースではなく、その〈極限値〉にあたるケース、すなわち、空間配置が主役を張っている当初のケースにこだわってみることもあながち無駄ではないと感じる(1)。

ワンウェイ・ミラーを挟んだ面接室と観察室の間における、まさにワンウェイの「観察する／観察される」から、その空間的反転（および、その反復）に支えられた「観察を観察する」（より正確には、「『観察する／観察される』を観察する」と称するべきかもしれない）への一大転換は、単なる空間配置上の工夫ではない。だから、その空間配置を単に踏襲することには、たしかにさしたる意味はない（「観察を観察する」については、映画「キッチンストーリー」につて論じた矢守（2010; 2018）も参照されたい）。

この空間配置上の一大転換が象徴するものこそが重要である。それは、言うまでもなく、セラピーに参加するすべての関係者間の関係性の革新であり、全員を包む環境・制度に対する抜本的反省と変革であり、つまりは、会話哲学の更新である。このことは、セラピストがクライアントとともに「はなし、きく」こと（「外的会話」と「内的会話」）の重要性、「ヒエラルキーからヘテラルキーへ」の移行といったキーコンセプトを用いて、著者によって繰り返し指摘されている。空間配置上の変化・革命は、セラピーそのものの変化・革命、ひいては、会話哲学の変化・革命と直結し、それを〈極限値〉として表現しているのだ（4.2節末尾も参照）。

2.3 「パノプティコン」と「まなざしの地獄」

リフレクティングに関して、あえて空間配置に拘泥してみたい理由をもう一つ示しておきたい。それは、何ごとかの空間配置が、そのことの本質を洞察するための重要な装置として機能して、私たちの理解を助けてくれるのは、どうもリフレクティングだけではなさそうだからである。ここでは、典型的な事例として、「パノプティコン」（ミッシェル・フーコー）と「まなざしの地獄」（見田宗介）を例示しておこう。この両者においては、空間配置一般というより、それぞれの空間配置が生み出す独特の視線の構造が特に重要な役割を演じている。つまり、「観察を観察する」が鍵を握っている点で、これら2つの事例はリフレクティングにおける空間配置の議論と大きな親和性をもっている。

「パノプティコン」は、よく知られている通り、哲学者ベンサムが考案した全展望監視システムで、中央に監視塔、その周囲に（半）円形に独房を置いた空間配置をもつ。巧妙な光学的配慮によって、暗い監視塔内からは明るい各独房を見通せるが、その逆は不可能である。つまり、独房内の囚人には塔内に監視者がいるかどうかがわからない。よって、監視者は究極的には省略可能である。

フーコーの洞察は、この空間配置が、近代社会における主体的個人（内面）の創出のメカニズムを象徴しているとしたことにあった。不可視の権力者による永続的な監視（いつでもどこでも見られている可能性があること）は、監視の視線の被監視者への内面化（自らを律する内的な規範化）を促し、やがて、フーコーの言う規律訓練型の権力に従順に従う（近代的）個人を大量に産み落とす。これは、前近代的な可視的な権力者による露骨な権力の行使の構造とは好対照をなしている。もちろん、パノプティコンという装置（空間配置）だけが重要なのではない ― ちょうど、リフレクティングでワンウェイ・ミラーだけが重要ではないのと同様に。その空間配置に象徴されているメカニズムこそが大切で、言うまでもなく、そのメカニズムは、パノプティコン形式の監獄だけでなく、学校や企業など、近代社会のあらゆる場面、状況で今も作動し続けている。

「まなざしの地獄」（見田, 2008）（初出は1973年）は、片田舎から上京し、最後は連続殺人事件（1968年）を引き起こした死刑囚N.Nの生涯を、その背景となる高度経済成長期の日本社会の構造変動とともに分厚く描いた著作である。しかし、それと同時に、N.Nと同時期に東京に流入してきた青少年を対象にした質問紙調査から、一見とりたてて注目すべき点もなさそうなデータも併せて紹介される。たとえば、「東京で就職して不満足な点」について尋ねる項目に対して、最も回答率の高かった選択肢は「落ちつける室（へや）がない」で、自由時間が少ない、仕事や職場への不満や、友人関係への不満など、就職に関する不満点としてはむしろ有力と思われる事由群をおさえてトップとなっていた。

ここでの焦点は、もちろん室、すなわち部屋という空間である。東京（都市）において、N.Nは、田舎者、単なる労働力などとして自分を否定的にまなざ

す視線（まなざしの地獄）に執拗にとらえられていた。そうした視線に支配される「関係からの自由への憧憬」（見田, 2008, p.36、傍点は原著者）が、N.Nにおいては殺人の引き金を引く遠因になってしまったわけだが、当時の若者一般にとっては、同じ「関係からの自由への憧憬」が、自らを突き刺す社会のまなざしからの遮蔽物としての「落ち着ける室」（空間）としてあらわれていたのだ。

大変興味深いことに、その後、見田（2012a）は、N.N（犯行当時19歳）と、N.Nの事件からちょうど40年後、2008年に発生した秋葉原通り魔事件の被告（犯行当時25歳）とを ― 言いかえれば、高度経済成長期における若者の殺人事件とバブル経済崩壊以降のそれとを ― 対照させ、後者に「まなざしの不在の地獄」を見ている。インターネット空間等への自己呈示に対する反響がない（少ない）こと、すなわち、自分に他者のまなざしが注がれていないことが犯行の背景としてあった可能性が報道されたからである。ネット空間における他者からの承認や肯定の視線の不足を嘆く若者をとらえた無数の調査データと通り魔事件の関係が、「落ち着ける室がない」が多数選択されたアンケート調査とN.Nの犯罪との関係とパラレルであることは明らかであろう。

こうして、「まなざし（の不在）の地獄」には、若者と社会との関係の様式が、時代の偏差をも浮き彫りにしつつ、空間配置の特徴として印象的に表現されている。社会から降り注ぐ否定的な視線を遮蔽するための空間、および、社会からの承認や肯定を期待しつつ開放された（ネット）空間 ― これらの空間は、物理的ないし電子的空間やその配置以上の豊かな意味を宿しているわけだ。

３．「あれかこれか」／「あれもこれも」

3.1 「差異を生む差異」

2番目の論点は、「あれかこれか」（either-or）の観点ではなく、「あれもこれも」（both-and）の観点（または、「あれでもなくこれでもない」（neither-nor）の観点）の重要性である。著者は、ガーゲンら（たとえば、マクナミー・ガーゲン, 2014）に代表される家族療法における新潮流（「ナラティヴ・セラピー」）、および、ベイトソンのコミュニケーション論やマトゥラーナのオートポイエーシス論と、リフレクティングとの密接な関わりに注意を促す。曰く、そこにすでにある現実が観察を待っているのではない。「観察者こそが『現実』と呼ばれる区別を生み出している」［p.27］。仮に、この社会構成主義の基本前提を受け入れるのであれば、「『そこにある』同じ世界を経験した人々がその世界について異なる描像をつくるゆえに、どちらの描いたものが正しいかという議論」［p.27］、すなわち、「あれかこれか」という構えは端から転倒していることになる。むしろ求められていることは、「数多くの可能な意味づけが数多くの世界を構成する」［p.27］ことを前提に、「あなたがたの理解の仕方に加えて、僕たちはこんなふうに理解しました」［p.14］と、「問題を『違ったふうに』考え、話し合うことのできる文脈」［p.16］を提供することである。とりわけ、斬新で、かつ問題解決に資する観察や、そうした観察を支える観察の文脈を提供することが要請される。

要するに、「専門家こそが『正解』を有して」［p.14］おり、「あれかこれか」を指定できるというのは思い込みに過ぎない。「あなたがやってきたことの代わりに、これをやってください！」［p.136］ではなく、「あなたがやってきたことに加えて、僕らのアイデアのうち、どれかを試してみたら、どうなるでしょう」［p.136］と、「あれかこれか」から「あれもこれも」へと移行することが必要なのだ。言いかえれば、「代わりに」の姿勢から「加えて」の姿勢へと移行すること ― 専門家（リフレクティングチーム）には、この移行作業を、面接者や相談者とともに共同で進めることが要請されていることになる。

「あれもこれも」について、著者はもう一つ重要な論点を押し出している。それは、「あれも」に「加えて」、さらに「これも」をリフレクティング・チームが面接者や相談者に伝えるとき、「伝えられる内容においても、伝えられる方法においても、普段と異なりすぎてはいけないということ」［p.39］である。著者は、ベイトソンによる情報の定義、すなわち、「情報とは『差異を生む差異である』」［p.29；傍点はオリジナル］に依拠しつつ、「小さすぎて受け手が気づかない差異」［同上］でも、「大きすぎてシステムに破壊的影響をもたらすかもしれない差異」［同上］でもなく、「感知しうる差異」［同上］が重要だと論じる。リフレクティングという手続きと従前の手続きとの間の差異（方法面の差異）においても、また同時に、リフレクティングの場に持ち込まれる「これも」と従前からそこにあった選択肢「あれも」との間の差異（内容面の差異）も、リフレクティングに関わる当事者たちに感知され、そこに変化（これまでとの差異）を生み出す程度には大きく、他方で、当事者との関係を根本から破壊して

しまったり、まったく理解不能と断じられたりしない程度には小さいものである必要がある。

3.2 「クロスロード」と〈二者択一〉

評者は、前項（3.1）で要約した著者の議論に共感すると同時に、評者自身が手がけてきた仕事との共通点を感じることもできた。それは、「クロスロード」という名称の防災ゲーム（ワークショップ）の取り組みである。特に、「クロスロード」の公表（2005年）から15年以上を経て近年発表した「『クロスロード』を用いた〈二者択一〉の克服」（矢守・杉山, 2021）と題した原稿で論じたこととの間には多くの共通項を見いだすことができた。矢守・杉山（2021）で直接扱っている素材は、コロナ禍と南海トラフ地震に関する「臨時情報」という名の新しい災害情報に対する社会の対応である。そのもっとも重要な論点は、両者には、〈二者択一〉の構造という明瞭な共通特性が認められる点である。「臨時情報」について深入りすることはここでは避けるが、上の論点の意味は、コロナ禍の本質が、「感染対策は急務だが、経済を“まわす”必要もある」という、ひと頃しばしば耳にしたフレーズに象徴されるジレンマ構造、つまり、きびしい〈二者択一〉にあることを考えれば説明不要と思われる。

さて、阪神・淡路大震災を機に防災教育ツールとして開発された「クロスロード」は、まさに、こうした〈二者択一〉状況によく適合する（ように見える）ツールである（詳しくは、矢守・吉川・網代, 2005; 吉川・矢守・杉浦, 2009; 矢守・GENERATION TIMES, 2014）。ちなみに、「クロスロード」とは、文字通り「分かれ道」のことである。実際、「クロスロード」は、被災地や防災活動の現場によく見られるジレンマ ―「あちらを立てればこちらが立たず」の構造をもつ矛盾や葛藤 ― を素材として、ゲーム参加者（市民や自治体職員など）が、〈二者択一〉の設問に「YES」または「NO」の判断を下すことを通して、防災を「他人事」ではなく「わが事」として考え、同時に相互に意見を交わすことをねらいとしている。

これに対して、矢守・杉山（2021）は、「フォーク・クロスロード」を鍵概念として、こうした従来の見方からの転換を図っている。ここでのフォーク（fork）とは、チェス用語で「両取り」という意味である。たしかに、「クロスロード」では、「YES/NO」、2つの選択肢しか与えられず、そのいずれか一方だけを選択することをゲーム参加者に求める。これは、言いかえれば、どんなに辛くても、一方は断念し棄却するように求めることを意味する。しかし、これは、実はこのツールが真に意図するところではなく、実際、現実のワークショップは、むしろ次のような形で進むことも多い。すなわち、「YES/NO」、2つの選択肢の双方を両立させるための第3、第4の道をゲーム参加者（関係者）が共同で考案・創出する方向に議論が進むのである。言いかえれば、〈二者択一〉は形式的なもので、実際には、「クロスロード」は、〈二者択一〉の葛藤構造（「あれかこれか」）を克服し、目下の課題や直面する事態を別の形で再組織化し、第3、第4の道を探る（「あれもこれも」を目指す）ための叩き台なのである。

以上より、矢守・杉山（2021）は、「クロスロード」は、コロナ禍や「臨時情報」に対する社会的対応の鍵となる「両にらみ」（ないし「二刀流」）を実現するためのツールだと結論づけている。「クロスロード」は、一見両立不能に思われる2つ（以上）の選択肢に対して「白黒」をつけるためのツールではない。むしろ、〈二者択一〉の構造を克服し、調停不能に見える選択肢間の葛藤を止揚し、双方を融合した「両にらみ」の解を関係者が共同で見いだすためのツール、まさに「あれもこれも」を実現するための「フォーク・クロスロード」だというわけである。

蛇足ながら、評者としては、この論点以外にも、リフレクティングの手続きと「クロスロード」の接点を感じた点がある。具体的には、少人数で構成される複数のグループごとに話し合いがもたれ、多くの場合、その結果を、グループ間（ないし、全員で）で共有するという手続きである。たしかに、「クロスロード」においては、グループAにおける話し合い（会話）をグループBやCが聞き、さらにその次にという手続きは、明示的なフェーズとしては組み込まれていない。しかし、各グループにおける会話の内容を相互に聞くというステップは、実質的には、「観察室」のメンバー（グループA）が「相談室」のメンバー（グループB）の会話を聞き、次にその逆を実施するという流れと大差のないものと言える。従来、明示的ではなかったこのフェーズにもう少し工夫を凝らすことで、「クロスロード」における「あれもこれも」のパワーを拡充することができるのではないかと考えている次第である。

4．アクションリサーチとの接点

4.1 変化・変革への寄与と留保

本書に「アクションリサーチ」という言葉は、ほ

とんど登場しない。評者の不注意でなければ、「臨床家が自分たちの実践についてクライアントに学ぶポスト・セラピー・インタビュー」［p.185-186］を、アンデルセンが「参加型アクションリサーチ」と称しているとの記述が見られるだけではないかと思われる。しかし、リフレクティングがその中核に保持している姿勢がアクションリサーチと通底していることは、これまでの議論からも明らかだと評者は思う。

著者は、ブラジルの教育学者フレイレの言葉を借りて、こう宣言している。「真の言葉を話すということは、世界を変革するということである…（中略）…大げさに聞こえるかもしれませんが、私たちが会話を通して私たちの日常を生み出し、その中で生きていく存在である以上、本当に話す、ということは、それほどのことでしょうし、本当に聞く、ということもまた、やはりそれほどのことでしょう。…（中略）…アンデルセンがその場にいる人々とともに初めてリフレクティングに取り組んだとき、それはたしかにひとつの世界のあり方を変革することを意味していました」（矢原, 2016, p.iii）。ベイトソンの影響を受けて、「差異を生む差異」、「変化を生む変化」［p.14］や、「問題を『違ったふうに』考え、話し合うことのできる文脈の提供」［p.16］を重要視するのも、このためであろう。

ただし、変化・変革に対する貢献については、微妙だが重要な留保条件がつけられている。アンデルセンは、セラピストとして成果を得ようとすることに対する倫理的責任について、次のように述べている。「何らかの変化が生じることに寄与する責任はあると思う。けれど、それがどんな種類の変化で、どんなふうに、いつ生じるのかは、僕の責任じゃない」［p.90］。前節で確認したように、セラピストは何が「正解」を知っているわけではない。「クライアントと『ともに』会話し、専門家としての介入やコントロールの構えを放棄したアンデルセンにとって、通常想定されるような意味でのセラピーの『成果』は、セラピストがその責任を負うべきものでも、そもそも負い得るものでもない」［p.90］。

では、セラピストは、またアクションリサーチャーはどのような意味で変化・変革に関わる責任をもちうるのか。アンデルセンの回答は、シンプルである。「それは、たとえば、人々を傷つけないことだ。（中略）クライアントは多くのサインを示してくれる。僕の仕事は、それらのサインを見聞きできるように、自分の感受性を鍛錬することだ」［p.90］。そして、アンデルセンは盟友グーリシャンの言葉を引いて、こうも言う。「『何をするかに専念するのではなくて（なぜなら、とても多くのことがあるから）、なすべきでない少数のことに専念せよ！』。アンデルセンがなすべきでないと考えていた最も重要なこととは、つねに他者を辱めないこと。実にシンプルなことだ」［p.115］。

ここには、変化・変革を志向しながらも、一見無条件に前向きに見える（何かを）「する」ことや、「改善する」ことへの健全な警戒心が認められる。2節で指摘したように、もともと、リフレクティングの発想は、「セラピストだけが観察し語り、クライアントはもっぱら観察され聞かされるだけ」というこの伝統的な関係性に対して彼が禁じ得なかった「居心地の悪さ」に由来していた。クライアントの症状なり家族の問題なりの「改善」を志向すること自体が、また、そのためにセラピストが発する言葉や行為が、クライアントを傷つけ、辱めている可能性はないのか。この懸念が「居心地の悪さ」の底流にあったのだろう。

こうした着眼は、別の箇所でも表明されており、それらもアクションリサーチをめぐる言説と共鳴しあうものである。たとえば、「専門家のことばが、失敗や欠点を記述することばから成る、いわば欠陥言語であるなら、何が生じるだろうか。…（中略）…専門家がその専門的知識の適用対象とみなす人々に向けて欠陥言語を投げかけ、浴びせかけ続けるような場において、人々がいかなる世に処するあり方を形づくることになるかは、実に自明のことだろう」［p.107-108］。

この指摘は、復興支援におけるアクションリサーチの場で、「めざす」かかわりと「すごす」かかわりを対照させた宮本（2015）の議論を思わせる。変化・変革を「めざす」かかわりは、「対象になんらかのより良い状態への変化を求めている時点で、同時に、対象の現在の状態の否定」（宮本, 2015, p14）を含んでおり、「『より良い状態をめざす』ということは、それに照らし合わせて現在の状態の何らかの欠如を暗黙の裡に示している」（同上）。現状の否定が、対象者を傷つけ、辱める可能性への配視である。また、本書では、リフレクティングという手法を持ち込む以前の段階こそ重要だとも指摘されている。「協働を開始する前に、いかにわれわれが協働し得るのかを他者と話し合う」［p.114］という姿勢である。これは、アクションリサーチに先立ち、その基礎となるべき「協働的実践」の重要性を説い

た渥美（2011）に通じるものだ。

4.2 「システムが変わる、自分も変わる」

リフレクティングとアクションリサーチとの交差は、前項（4.1）で見た研究者あるいは実践者の倫理的で基礎的な構えに限定されるわけではない。もう一つ重要な論点がある。それは、くだんの変化・変革とは、そもそも、だれに（あるいは、どこにおいて）生じるのかという論点である。専門家（たとえば、セラピストや研究者）の介入を通して、何らかの問題解決に資する重要な変化・変革が、非専門家（たとえば、クライアントや地域住民）において生じる ― こういった伝統的なフレームワークはとうに破綻しており、私たちは、その先のステージを見据えているわけだが、新たなフレームワークとはどのようなものか。

回答は、再び本書の中にある。「セラピーにおいてセラピストが唯一変化させられるのはセラピスト自身」［p.102］、「自らを表現することを通して、人は他者や自分自身に情報を伝える（informing）のみならず、実際、その瞬間において自分自身を形づくり（forming）、おそらく、次の瞬間にはいくぶんか異なる自分自身を形づくっていく」［p.113］。この意味で、アクションリサーチにおいても、変化・変革は、まずはアクションリサーチャー自身に生じるはずであり、また生じなければならないと言えよう。

ただし、この命題を、アクションリサーチでは、現場の人びとが変わるだけでなく、アクションリサーチャーも自ら変わるべし ― このように受け取るのは、いささか軽い理解と言わねばならないだろう。「自分が変わる」とは、「上から目線ではなく、自らも学びましょう」のような「相互学習のすすめ」とはちがう。「自分が変わる」ことの真の意味は、自ら（セラピスト）だけでなく現場の人びと（クライアント）を含むシステム全体が変わることと関連づけてはじめて十全に理解できる。

このことは、別著（矢原, 2016）で、著者がベイトソンの「治療的ダブルバインド」に言及しているくだりを参照すると理解しやすい。治療的ダブルバインドとは、たとえば、不眠を訴える患者に対して「起きているように」など、一見不可解な、もっと直截に言えば、逆効果とも思える指示を治療者が与える手法である。しかし、一呼吸置いて考えるとすぐにわかることだが、こうした逆説的な指示は、一見パラドキシカルなように見えて、その実、患者が眠れても眠れなくても、前者の場合、不眠の解消として、後者の場合、患者自身による睡眠のコントロール（感）として、それぞれ治療的な効果をもたらしうる点で、実に巧みなアプローチである。

矢原（2016）が明解にまとめているように、ここで、変化について、（治療）システムの内側で生じ、システム自体は変わらない第一次変化と、システム自体が変化する第二次変化とを区別することが有効である。不眠に苦しむ患者があれこれ努力したり、治療者が不眠の解消に直接つながると思われる介入をあれこれ（薬の処方や入眠法の伝授など）試みたりするのは、第一次変化である。しかし、こうした第一次の変化は、「眠ろうと努力する→眠れなくなる→さらに努力する→さらに眠れなくなる」という悪循環、加えては、治療者と患者（ないし、面接者と相談者、専門家と非専門家）の間の過保護と過依存の悪循環を帰結する場合が多い。つまり、第一次の変化を求めることは、不眠という問題の解決を志向しているようでいて、その実、不眠の問題を根底から支えているシステム自体の強化（変化の妨害）に ― しかも、治療者（アクションリサーチャー）自身もその一翼を担う形で ― つながるのだ。それに対して、治療的ダブルバインドに象徴されるアプローチは、上の意味での2つの悪循環に陥ったシステムの枠組み全体を変えてしまう効果、すなわち、第二次変化を喚起する働きをもっている。

第一次変化から第二次変化への焦点の移行は、「『病んだ環境では病気を直すことができない』、だから、『まず治療環境を治していこう』」（矢原, 2016, p.65）ということでもある。治療環境とはここで言うシステムのことに他ならないからである。こうした理解は、広く人口に膾炙している障害に関する個人モデルと社会モデルの対比や、その防災意識分析バージョンとも言えるDaimon, Miyamae and Wang（2023）の知見にも通じる。障害者を支援するための、あるいは、防災意識を高めるためのアクションリサーチにおいても、問題を抱えた対象（その第一次変化）ではなく、問題を生み出すシステム（その第二次変化）に光を当てる姿勢は、今後ますます重要となるであろう。

翻って考えてみれば、2節で主題的に取り上げたリフレクティングの空間配置上の逆転（「観察室が面接室に、面接室が観察室に」という逆転）が真に目指したものも、ここで言う第二次変化であったと言うことができるだろう。セラピーシステム全体にかかる第二次変化の中でこそ、また、そのようなシステムの変化を伴って初めて、リフレクティング・

チームのメンバー、面接者、相談者など、すべてのシステム参与者において「自分が変わる」ことが実現し、リフレクティング・プロセスが駆動される。

2.2節の末尾で、リフレクティング・プロセスにおける空間配置上の転換は単なる手続き上の工夫ではなく、セラピーそのものの革新を〈極限値〉として表現している、と書いた。空間配置の変化は、ここで言うセラピーシステム全体にかかる第二次変化を、―他の〈平均値〉に近い事例、すなわち、第二次変化を指向してはいるが、それをまだ徹底しえてない取組事例群と比較して―より鮮明な形で顕在化させて象徴していると言えるのだ。

補注

(1) 〈平均値〉と〈極限値〉は、見田（2008）が名著『まなざしの地獄』で提唱した概念である。この概念について、大澤（2008）は、次のように整理している。〈平均化／極限化〉とは、一言で言えば、研究対象（ここでは「リフレクティング・プロセス」）の代表性にかかわる区別である。〈平均化〉とは、広義の平均値が全体を代表していると考えることである。〈平均化〉は、質問紙調査などから得られる量的なデータと親和性が強く、対象の属性を概括的にとらえるには好適である。他方、〈極限化〉とは、個別の対象に「萌芽的に見られる動的な傾向性のベクトルの収斂する先」（大澤, 2008, p.104）をとらえようとすることである。すなわち、〈平均値〉に近い事例においては、「アイマイなままに潜在化したり、中途半端なあらわれ方をしたり、相殺し合ったりしている諸要因が、より鮮明な形で顕在化している、そのような事例」（見田, 2012b, p.157、傍点は原著者）で現象全体を代表させる。〈極限化〉においては、通常、質的な分析がより威力を発揮する。なお、〈平均化／極限化〉を防災・減災の分野に適用した事例としては、矢守（2018）、矢守・岡田（2023）を参照されたい。

参考文献

アンデルセン, T.（2015）．リフレクティング・プロセス（新装版）―会話における会話と会話（鈴木浩二訳）金剛出版

渥美公秀（2011）．協働的実践　矢守克也・渥美公秀（編著）「防災・減災の人間科学」（pp.2-7）　新曜社

Daimon, H., Miyamae, R. and Wang. W.（2023）. Navigating theories of actions on disaster prevention: A systematic review on disaster research in Japan. *Natural Hazards Review*, 24(2). https://ascelibrary.org/doi/full/10.1061/NHREFO.NHENG-1630

吉川肇子・矢守克也・杉浦淳吉（2009）．クロスロード・ネクスト―続：ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション ナカニシヤ出版

マクナミー, S. & ガーゲン, K.（2014）．ナラティヴ・セラピー―社会構成主義の実践（野口祐二・野村直樹訳）遠見書房

見田宗介（2008）．まなざしの地獄―尽きなく生きることの社会学 河出書房新社

見田宗介（2012a）．現代社会はどこに向かうか―生きるリアリティの崩壊と再生 弦書房

見田宗介（2012b）．定本見田宗介著作集〈8〉社会学の主題と方法（pp.153-181） 岩波書店

宮本匠（2015）．災害復興における“めざす”かかわりと“すごす”かかわり―東日本大震災の復興曲線インタビューから 質的心理学研究, 14, 6-18.

大澤真幸（2008）．解説　見田宗介（2008）まなざしの地獄―尽きなく生きることの社会学（pp.99-122） 河出書房新社

矢原隆行（2016）．リフレクティング―会話についての会話という方法 ナカニシヤ出版

矢守克也（2010）．アクションリサーチ―実践する人間科学 新曜社

矢守克也（2018）．アクションリサーチ・イン・アクション―共同当事者・時間・データ 新曜社

矢守克也・吉川肇子・網代剛（2005）．防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション―「クロスロード」への招待 ナカニシヤ出版

矢守克也・GENERATION TIMES（2014）．被災地DAYS：時代QUEST―災害編 弘文堂

矢守克也・岡田夏美（2023）．メタレベルの視点に立った防災・減災に関する質問紙調査研究の分析 実験社会心理学研究, 63, 14-31.

矢守克也・杉山高志（2021）．「クロスロード」を用いた〈二者択一〉の克服―新型コロナ感染症と南海トラフ地震の臨時情報対応をめぐって―　地区防災計画学会誌, 21, 64-74.